

## 動詞 lassen の用法に関する考察 (4)

——「受動体系」の中での lassen ——

井出万秀

### 0. はじめに

これまで lassen の用法に関しての問題点の概観 (『詩・言語』第31号), lassen 文の意味解釈 (『詩・言語』第32号), 「Kausativ 体系」における lassen の位置付け (『詩・言語』第35号) と検討してきたが, 今回は受動文の様々な形式を「受動体系」ととらえ, その中で lassen が担う役割について考察する。

### 1. 受動文のひとつとしての lassen の用法

lassen の用法の一部は, 多くの文法書において受動文の一種として扱われている<sup>1)</sup>。例えば Helbig/Buscha (1972) では受動文の「競合形式」としてあげられている。

Konkurrenzformen des Passivs mit Modalfaktor.

(...)

4. Konstruktion mit *sich lassen* + Infinitiv.

Der Direktor *läßt sich* anmelden.

(= Der Direktor *soll/will* angemeldet werden.

Die Arbeit *läßt sich* lesen.

(= Die Arbeit *kann* gelesen werden.)

(S. 156)

lassen の用法の一部が受動文と比較される場合, その統語構造は lassen の主語を先行詞とする再帰代名詞を伴っていることが条件である。「werden-受動文」との関係については, “synonyme Form” (Admoni) とされていたり “Konkurrenzform des Passivs mit Modalfaktor” (Helbig/Buscha) といったように様々である。受動文との類似表現に焦点をあてた研究でも “Passivsynonym”<sup>2)</sup>, “syntaktische Variante”<sup>3)</sup> と名付けられている。どの名称が lassen の用法に最も合致するかは後に扱うが, ここでは, 再帰代名詞を伴う lassen の用法を考察対象とし, それが用いられているコンテキストの分析を中心に, 「werden-受動文」との差異を明らかにして行く。以下この用法を「lassen + sich + 不定動詞」と呼ぶ。再帰代名詞を伴う lassen の用法においても, 意味解釈は問題となり得る。先にあげた Helbig/Buscha (1972) でも “zulassen” と “veranlassen” の区別が指摘されている。

Das Kind *läßt sich* waschen.

(a)=Das Kind *veranlaßt*, daß es gewaschen wird.

(b)=Das Kind *läßt zu*, daß es gewaschen wird.

(S. 156)

また H. Kolb (1966) では、3つの解釈の可能性が指摘されている<sup>4)</sup>。

Er läßt sich einordnen.

- a) er veranlaßt, daß er eingeordnet wird.
- b) er läßt zu, daß er eingeordnet wird.
- c) er kann eingeordnet werden. (=es ist möglich, ihn einzuordnen.)

このように、「lassen+sich+不定動詞」は、受動文の一種として扱われるのと同時に、再帰代名詞を伴わない場合の lassen の用法と同様にいくつかの意味解釈の可能性も存在する。辞書記述では、Kolb のあげる c) の意味は、“etw. läßt sich+Inf.” の形式の持つ意味として記述されている<sup>5)</sup>。一方 Helbig, Kolb のあげる a), b) の意味は、再帰代名詞を伴わない用法も含めた中で、それぞれ“zulassen”と“veranlassen”の項に位置付けられている。例えば、Duden: Deutsches Universalwörterbuch (1983) では“veranlassen, bewirken (daß etw. geschieht)”の項に“du läßt dich verleugnen”という例が、また“zulassen, erlauben; dulden; nicht an etw. hindern”の項に“ich lasse mich nicht beleidigen”という例があげられている。つまり、辞書記述では「lassen+sich+不定動詞」の構文でも、lassen の主語が「もの」である例は、ひとつの統語的・意味的単位として区別されている。また受動文との比較の際にも、この主語が「もの」である「lassen+sich+不定動詞」は、話法の助動詞 können を伴う「werden-受動文」、 「sein+zu+不定動詞」、 「sein+形容詞-bar/-lich」と比較される<sup>6)</sup>。一方 lassen の主語が「ひと」の場合は、このような類似表現とは比較されず、“veranlassen”か“zulassen”の意味解釈が問題とされている。同じ統語形式でありながら、一方は können を伴う「werden-受動文」と比較され、もう一方は“veranlassen”か“zulassen”かの意味解釈が問題とされるという差は、一見したところ lassen の主語が「ひと」であるか「もの」であるかに左右されているように見える。本稿では、この「ひと」か「もの」かという区別が lassen のこの用法にとって本質的なメルクマールであるかどうかを検討する。したがって受動文と比較される「lassen+sich+不定動詞」の構文を便宜上、主語が「ひと」である「lassen+sich+不定動詞 A」と、主語が「もの」である「lassen+sich+不定動詞 B」に分け、それぞれ「werden-受動文」との比較を行う。また、辞書記述に見られる“zulassen”, “veranlassen”と言った意味が、受動文の一種としての lassen の用法の中ではどのように位置付けられるかという点についても考察する。

## 2. 「lassen+sich+不定動詞 A」と「werden-受動文」

この章では第1章で区別した「ひと」を主語とする「lassen+sich+不定動詞 A」と「werden-受動文」との比較を行う。次のふたつの文を比較した場合、

- (1) Sie überredete ihn.
- (1'a) Er ließ sich überreden.
- (1'b) Er wurde überredet.

「lassen+sich+不定動詞」と「werden-受動文」の両者の共通点は、能動文では目的語であるものが、主語として表現されている、という点に求められる。それ故に「lassen+sich+不定動詞」は「werden-受動文」の「同義形式」、「競合形式」として扱われるわけであるが、

実際のコンテキストにおいて、両者は自由に入れ替えられるというわけではない。例えば、Joseph Roth の『Hotel Savoy』の次のコンテキストでは入れ替えが困難のように思われる。このコンテキストでは、主人公の Gabriel Dan がホテルに何日か滞在し、そのホテルに長期滞在している人々及びその町の貧富の差、人々のみじめな生活を目の当たりにして、歪んだ社会の縮図としてのホテルに対して反感を覚え、早く別の町に向かって出発したいと思う一方、ホテルの中で知り合ったヴァリエテの踊り子 Stasia に特別な感情も抱いている。

- (2) Nun fühlte ich, wie Haß in mir aufstieg gegen das Hotel Savoy, indem die einen lebten und die andern starben, in dem Ignatz (Liftboy des Hotels) Koffer pfändete und die Mädchen sich nackt ausziehen mußte vor Fabrikanten und Häusermaklern. Ignatz war wie ein lebendiges Gesetz dieses Hauses, Tod und Liftknahe. *Ich werde mich nicht durch Stasia verlocken lassen, hierzubleiben, denke ich.*<sup>7)</sup>

また「lassen+sich+不定動詞」が「werden-受動文」と対比的に用いられているコンテキストもある。Joseph Roth の『Radetzkymarsch』の中で、戦場で皇帝の命を救い貴族の称号を与えられた Trotta の孫で将校の Carl Joseph von Trotta は配属部隊の駐屯地のある町で、ある晩親友の軍医 Max Demant の夫人が劇場からひとり出て来るのに会い、夫人を自宅まで送るが、その際ふたりは、将校らのたまり場であるカジノの前を通りかかる。一方、その前に Carl Joseph と劇場の前で会い、Carl Joseph から「待ち合わせがある」と聞かされていた Taittinger もカジノにいて、Carl Joseph, Max Demant, Demant 夫人のことについて他の将校らと噂話をしていた。そしてちょうどそこへ Carl Joseph と Demant 夫人が通りかかる。カジノにいてそれを目撃した騎兵隊長の Tattenbach は次の晩カジノにやってきた軍医 Demant を酔った勢いで侮辱し、事は Demant と Tattenbach の間で名誉のための決闘へと発展する。結局ふたりとも決闘で倒れ、Carl Joseph はその部隊を去り別の部隊に移ることになる。別の部隊に移ることについて Carl Joseph の内心が次のように描かれる。

- (3) Es verstand sich von selbst, daß er (Carl Joseph von Trotta) das Regiment verließ und in ein anderes eingereiht wurde. Er aber *suchte* nach irgendeiner schwierigen Aufgabe. Er *suchte* in Wirklichkeit nach einer freiwilligen Buße.<sup>8)</sup>(...) *Man mußte sich also zur Infanterie transferieren lassen.* Nicht ohne Mitleid sahen die berittenen Kameraden auf die Truppe zu Fuß, nicht ohne Mitleid werden sie auf den transferierten Trotta sehen. Der Großvater war auch nur ein einfacher Hauptmann bei der Infanterie gewesen. Zu Fuß marschieren über den heimatlichen Boden war fast eine Heimkehr zu den bäuerlichen Vorfahren. (...) Nein! Es tat dem Leutnant durchaus nicht leid, dieses Regiment und vielleicht die Kavallerie zu verlassen!<sup>9)</sup>

(3)のコンテキストより、このような事件のあった後、Carl Joseph が同じ部隊に留まることは不可能で、別の部隊に編入されることは避けられないが、Carl Joseph は自ら苛酷さを求めよう (suchte) としていることがわかる。そして騎兵隊から歩兵隊へと降格させてもらおうと決意する。その後 Carl Joseph は未亡人となった Demant 夫人を訪れる。その時の会話に以下のような箇所がある。

- (4) “Sie werden also transferiert?” fragte Frau Demant.

“*Ich lasse mich transferieren !*” sagte er, (...) <sup>10)</sup>

ここでは「werden-受動文」と「lassen+sich+不定動詞」が対比的に用いられている。(3)のコンテクストの中に“Nicht ohne Mitleid werden sie auf den transferierten Trotta sehen”と出てくるように、事柄は「werden-受動文」でも「lassen+sich+不定動詞」でも結果的には「配置替えされた」という点で同じであるが、その事柄に対する当事者の態度、かかわり方に関して差が見られ、「lassen+sich+不定動詞」の場合には、当事者がその事柄を容認している、それをよしとしている、という点がはっきりと出ている。(3)のコンテクストでは、「不祥事の責任で配置替えされ、歩兵隊にとばされてきたトロッタ、と馬上の同僚は哀れむだろうが、俺はそれでいいんだ、それを望んでいたんだ、部隊を去ることも、騎兵隊から歩兵隊に移ることも何の苦痛でもない」という Carl Joseph の気持ちが描かれている。そのような背景での会話である(4)でも、配置替えが本人の意思に適ったものであり、単に軍律で機械的に左遷され、不可抗力なものであったわけでないことがはっきりと区別されている。

これまで「lassen+sich+不定動詞」が用いられているコンテクストの分析から「lassen+sich+不定動詞」は、主語にある人物が、不定動詞であらわされる事柄を「容認している」、「よしとしている」、「望んでいる」、「反対しない」というようなコンテクストで用いられていることが観察された。このようなコンテクストを人為的に構成して「lassen+sich+不定動詞」と「werden-受動文」を比較した研究としては Rottluff (1982) <sup>11)</sup> があげられる。その中で次のような例があげられている。なお左上方の星印は意味的に不適なことをあらわす。

- (5) Die Mutter fordert vom Kind, daß es (das Kind)
- (5a) \*gewaschen wird.
- (5b) sich waschen läßt.
- (6) Der Arzt teilt dem Patienten mit, daß er (der Patient)
- (6a) operiert wird.
- (6b) \*sich operieren läßt.

(5)の例において「werden-受動文」が不適で、「lassen+sich+不定動詞」が適当な理由については、次のように説明されている。

- (5') *Fordern* impliziert, daß der Auffordernde versucht, den Aufgeforderten zur Ausführung einer Handlung zu bewegen. Vom Aufgeforderten wird eine Aktivität als Folge der Aufforderung erwartet. (S. 337)

一方(6)の例において「werden-受動文」が適当な理由については次のように述べられている。

- (6') Da in unserem Fall das Matrix-Objekt mit dem Subjekt des Komplementsatzes identisch ist, bedeutet das, daß “etwas mit ihm gemacht werde soll.” Es erhält Kenntnis von einer Entscheidung, die getroffen worden ist, über ein zukünftiges Geschehen, dessen Träger es selbst sein soll. Es ist dabei das passive Element. (S. 337)

fordern や mitteilen のように「要求」、「伝達」の動詞の他 erlauben などの「許可／禁止」の動詞、loben など「評価」の動詞、そして zornig, glücklich などの形容詞がコンテクスト

に用いられている<sup>12)</sup>。

- (7) Ein Mann erlaubt Hans, daß er (Hans)  
 (7a) \*von einem Spezialisten geprüft wird.  
 (7b) sich von einem Spezialisten prüfen läßt.
- (8) Ein Mann lobt Hans, weil er (Hans)  
 (8a) \*von einem Spezialisten geprüft wird.  
 (8b) sich von einem Spezialisten prüfen läßt.
- (9) Ein Mann ist ärgerlich über Hans, weil er (Hans)  
 (9a) \*von einem Spezialisten geprüft wird.  
 (9b) sich von einem Spezialisten prüfen läßt.

(7)のように主文に「許可／禁止」の動詞を用いた例において「werden-受動文」が不適当な理由については次のように説明されている。

- (7') Es ist also notwendig einer Handlung vorausgegangen, die eine Situation geschaffen hat, die die Entscheidung des Matrix-Subjektes erforderlich macht, damit das Matrix-Objekt die gewünschte Handlung ausführen kann. Das Matrix-Sujekt kann diese Aktivität zur Ausführung der Handlung verbieten oder erlauben. Das Matrix-Objekt, das die Erlaubnis erhält bzw. nicht erhält, ist das aktive Moment und der Träger der Handlung im Nebensatz. (S. 328)

(8)のように主文に「評価」の動詞を用いた例において「werden-受動文」が不適当な理由については次のように説明されている。

- (8') Das Matrix-Subjekt ist in einen bestimmten Zustand versetzt (zornig sein, glücklich sein, ...), für den das Verhalten des Komplementsatz-Subjekts verantwortlich ist. Dieses hat den Zustand durch eine Handlung, Entscheidung o. ä. herbeigeführt. Diese Handlung, Entscheidung o. ä. wird im Komplementsatz ausgedrückt und muß, da sie auf eigene Aktivität des Subjekts des Komplementsatzes zurückzuführen ist, mit Hilfe der *lassen*-Konstruktion syntaktisch realisiert werden. (S. 328)

「望む行為 (gewünschte Handlung)」、 「能動性 (Aktivität)」などのことばに見られるように「lassen+sich+不定動詞」の用いられる環境には事柄の担い手の「能動性」が観察される。Joseph Roth『Radetzkymarsch』のコンテキストの中で確認された、ある事柄への「容認」、「それをよしとする」、「反対しない」と言った意味、および Rottluff (1982) の中で指摘されている「能動性」などに共通していることは、自分を対象とした、自分を何らかの形で巻き込む事柄が、主語にとって、全く予期せず自分の意思に関係なく生じたのではなく、主語はその事柄に対して何らかの形で意識的にかかわっている、という点である。例えば、(9)の例文において「Hans が診断される」という事柄は両方の表現に共通しているが、その事柄に対し当事者 Hans がどうかかわっているのかという点で、「werden-受動文」は特に何も言っておらず、出来事だけを述べているのに対し<sup>13)</sup>、「lassen+sich+不定動詞」では、当事者が意識的にかかわっていることがあらわされている、という違いがある。「las-

sen+sich+不定動詞」におけるこのような意味特徴を主語の「意思性」と名付ける。

このように「werden-受動文」と「lassen+sich+不定動詞」は、自分を巻き込む事柄への「意思性」という点ではっきりとした対立をなしているわけであるが、その対立と辞書記述に見られる“veranlassen”, “zulassen”などの意味解釈との関係はどうなるか以下検討してみる。実際のコンテキストの中で「lassen+sich+不定動詞」の意味解釈が“zulassen”であるか“veranlassen”であるかを区別することも可能である。Joseph Roth 『Das Kartell』の中で、女性参政権運動の指導者 Sylvia がデモの前日に姿をくらましたことが新聞のテーマとなり、作品の最後でその理由が解明される。彼女が姿をくらましたのは、新聞記者 Baker が仕掛人となって、闘牛士 Pedro が Sylvia を誘拐したのであるが、そのからくりについて Pedro から Baker に次のような手紙が書かれている。

(10) Lieber Freund !

Nun weiß ich erst, was ich Dir (Mr. John Baker) und Deinem Reporterehrgeiz zu verdanken habe. Dein Einfall, mich in Miß Sylvia verliebt zu machen, war vortrefflich. Dein Rat, sie zu entführen, noch trefflicher. Im übrigen war sie mit allem einverstanden. Sie wollte einfach nicht mehr Bomben werfen. Jedes Weib wartet schließlich doch nur auf ihren Stierkämpfer. (...) Ich entführe sie *mit ihrer Einwilligung*.<sup>14)</sup>

その後 Baker が属する新聞に次のようなニュースが載る。

(11) New York, den 12. November.

(Von unserem Sonderberichterstatte)

Die mysteriöse Angelegenheit der Miß Sylvia Punkerfield ist geklärt. *Miß Sylvia ließ sich von dem portugiesischen Stierkämpfer Pedro dal Costo-Caval entführen.* (...) <sup>15)</sup>

上のコンテキストで「lassen+sich+不定動詞」は、“mit ihrer Einwilligung”ということが示すとおり“zulassen”と解釈できるであろう。またコンテキストによっては“veranlassen”と解釈される場合も存在する。Joseph Roth 『Hotel Savoy』で、Neuner 氏の経営する工場の労働者がストライキを続けているが、Neuner 氏は妥協しない。主人公 Gabriel Dan の戦友で、ホテルのある町で偶然再会した Zwonimir は革命家を称し、労働者や貧しい人々の不満を煽る。経営者の Neuner 氏は Zwonimir にとってはもちろん敵である。Zwonimir と Gabriel Dan はロシアからの引き揚げ者らとともに慈善無料食堂で昼食をとるが、ここでもコックらが労働条件に不満なため、食堂が閉鎖されるという噂が流れている。そこで Zwonimir が言う。

(12) Man hörte, daß die Köche unzufrieden waren, sie wollten nicht für geringen Lohn einen ganzen Tag arbeiten. Von den Wohltätigkeitsdamen, die umsonst und ehrenhalber die Aufsicht führen sollten, war am zweiten Tag nichts mehr zu sehen. Zwonimir hatte eine ›Tante‹ genannt, und man drohte, die Küche zu sperren. ›Wenn sie nur die Küche sperren !‹ sagt Zwonimir. ›Wir werden sie schon aufmachen, oder *wir werden uns von Herrn Neuner zum Mittagessen einladen lassen.* Seine Suppe ist bestimmt besser.‹<sup>16)</sup>

このコンテキストでは「lassen+sich+不定動詞」は“zwingen”, “veranlassen”と解釈で

きよう。辞書に記載されているような意味解釈はもちろん可能であるが、結局はコンテキスト次第であり、“zulassen”, “veranlassen” などの意味区別が困難な場合もある。

「lassen+sich+不定動詞」の特徴である、自分を巻き込む事柄に対する主語の「意思性」から見た場合、“zulassen”, “veranlassen” などの意味解釈は「意思性の度合い」と考えられるであろう。(12)の例におけるように「意思性」がかなり強く出ている場合もあれば、(11)の例のようにもう少し弱い場合もある。次の用例においては、この「意思性」は「反対しない」、「逆らわない」くらいにかなり消極的になっている。このコンテキストは、50年間刑務所にいた人間がすっかり変わった町中に出、初めて見る地下鉄のホームで驚き、どうしてよいかわからないでいるシーンである。

- (13) *Georg Burckhard* bekam von mir eine Untergrundbahnfahrkarte, stand ratlos auf dem Perron, ließ sich hineinschieben in einen Zug und glaubte, die Unterwelt wäre verrückt geworden.<sup>17)</sup>

「lassen+sich+不定動詞」は、人の流れに逆らわないで、人の流れに押し込まれるままに車内に入った、という状況をあらわしている。「逆らわない」という程度の「意思性」で、まさに「受動的」である。このように「意思性」には、かなり積極的、「能動的」な極からかなり消極的、「受動的」な極まで幅が存在する。コンテキストがあって初めて判明する“zulassen”, “veranlassen” という意味解釈は「意思性」とは別のレベルに位置付けられ、「意思性」がコンテキストの中でとる具体的な意味と考えられよう。能動文が最も「能動的」で、受動文が最も「受動的」とすれば、「lassen+sich+不定動詞」はその中間に位置すると考えられる。「lassen+sich+不定動詞」は主語のはっきりとした「意思性」の存在で「werden-受動文」と対立をなし、「意思性」は具体的なコンテキストの中では“befehlen”などの積極的なものから“nichts dagegen tun”などの消極的なものまで幅が存在する。

### 3. 「lassen+sich+不定動詞 B」と「werden-受動文」

「lassen+sich+不定動詞」の主語が「もの」の場合は können を伴う「werden-受動文」と比較される。次のふたつの文を比較した場合、

(14a) Der Satz läßt sich übersetzen.

(14b) Der Satz kann übersetzt werden.

両者の共通点は、不定動詞または過去分詞であらわされている動詞の主語、目的語の関係に関して、能動文では目的語になるものが主語になっていること、動詞のあらわす行為の担い手が表現されていないこと((14b)では行為の担い手を前置詞句によって付加することが可能であるが、(14a)ではそれが不可能であるという違いがある)、そして“können”という意味の3点である。この比較に関しては幾つかの研究もなされているので、ここではその結果をまとめる形とする。(14a)と(14b)の間に見られる差に関して、H. Kolb (1966) では次のように述べられている。

- (15) Wenn gesagt wird: *die Tür kann nicht geöffnet werden*, so bleiben für die Ursache mehrere Möglichkeiten; es kann daran liegen: entweder daß man keinen Schlüssel dazu

hat oder es nicht gestattet ist (hierbei wären allerbings die Modalität *sollen* oder *dürfen* eher am Platz) oder daß der Hinderungsgrund in der Beschaffenheit der Tür liegt. Und diese letzte Ursachenangabe allein oder doch vorzugsweise ist es, die durch die Formulierung: *die Tür läßt sich nicht öffnen*, nahe gelegt wird. (...) Es (*sich* plus Transitivum plus *lassen*) bezieht die Modalität stärker und eindeutiger auf die Natur des Gegenstandes, von dem die Rede ist, als auf das Vermögen dessen, der mit dem Gegenstand zu tun hat. (S. 185)

また Brinker (1971) でも同様なことが指摘されている。

- (16) Während das passivische *können*-Gefüge die Ursache einer Möglichkeit oder Unmöglichkeit doch mehr in einen genannten oder nicht genannten “Agens” legt, stellt das *lassen*-Gefüge sie in der Sache selbst gründend dar. (S. 121)

ある行為の「可能／不可能」の原因が、その行為の対象物そのものの性質による場合には「lassen+sich+不定動詞」が用いられ、「werden-受動文」は、対象物の性質およびその対象物にかかわる人間の能力のどちらもあらし得ることは次のテスト例からも確認できる。

- (17) Weil der Pförtner den Schlüssel verloren hatte,  
 (17a) \*ließ sich die Tür nicht öffnen.  
 (17b) konnte die Tür nicht geöffnet werden.

(17a) が不適当な理由は次のように説明できよう。すなわち、鍵をなくしたためドアが開けられないというような場合、原因はドアの性質によるものではなく、ドアを開けようとする人間にあるため、ドア（対象物）自身の性質が原因となって、ある行為が不可能なことをあらわす「lassen+sich+不定動詞」は不適当である。「lassen+sich+不定動詞」に、実際の行為の担い手をあらわす前置詞句を付加できないことは、この構文が、ある行為の可能、不可能が対象にかかわる人間によるものでないことをあらわすことと全く無関係ではないであろう。

さて辞書記述では「lassen+sich+不定動詞」が「可能」の意味をもつのは、主語が「もの」である場合と記述されている<sup>18)</sup>。しかし次の例に見られるように、主語が「もの」でなくとも *können* を伴う「werden-受動文」と書き換えられる場合も存在する。

- (18) »Kinder«, erklärte der Richter, sind unsere natürliche Feinde. Wenn es sie nicht gäbe, so wäre die Menschheit längst ganz in unserer Gewalt. *Kinder lassen sich viel schwerer zum Zeit-Sparen bringen als alle anderen Menschen*. Daher lautet eines unserer strengsten Gesetze: Kinder kommen zuletzt an die Reihe.<sup>19)</sup>

人々を時間節約へと駆り立て、時間を盗む灰色の男たちのひとりが、子供を相手にして失敗し、その男が灰色の男の世界で裁判にかけられた時、裁判官から言い渡されたことばである。ここでは Kinder は「ひと」ではあるが、コンテキストからは “Kinder können viel schwerer zum Zeit-Sparen gebracht werden als alle anderen Menschen” と解釈できよう。主語が「もの」である場合の「lassen+sich+不定動詞」にみられる意味と同じである。したがって主語が「もの」であることは *können* を伴う「werden-受動文」との書き換えの決定的なメルクマールではない。



第 1 章で引用した次の例において、

- (19) Er läßt sich einordnen.  
 (19a) Er veranlaßt, daß er eingeordnet wird.  
 (19b) Er läßt zu, daß er eingeordnet wird.  
 (19c) Er kann eingeordnet werden.

(19a) と (19b) は、第 2 章で考察したように、主語の「意思性」の度合いの差で、どのような程度であれ主語が自分を巻き込む事柄に何らかの「意思性」をもってかかっている場合である。これに対し (19c) は、主語の「性質」が原因となってある事柄の可能または不可能が左右されることをあらわしている。つまりここでは「意思性」が問題とされていない。これまでは便宜上、主語が「ひと」か「もの」かで「lassen+sich+不定動詞」をふたつにわけて考察してきたが、両者の決定的な差は、主語が「ひと」か「もの」かではなく、主語の「意思性」を問題にするか、それとも「性質」、「特徴」を問題にするかにあると考えるべきであろう。主語が「もの」の場合、比喩的な場合を除いては、「もの」であるが故に「意思性」は問題とならない。これに対し「ひと」の場合は「意思性」を持ち得、それが問題となるのは勿論のこと、「意思性」と関係なく「性質」も問題となり得る。そのどちらが問題とされているかを決定するのはコンテキストである。「lassen+sich+不定動詞」において、「意思性」が問題とならない場合（典型的な例は主語が「もの」の場合）、同構文は können を伴う「werden-受動文」との書き換えが可能で、「意思性」が問題となる場合（その典型は主語が「ひと」の場合）、「zulassen」、「veranlassen」などを用いたパラフレーズが可能となる。第 2 章、第 3 章の考察を総合する形でこの特徴をまとめると次のようになる。すなわち「lassen+sich+不定動詞」は、主語の「意思性」において「werden-受動文」と対立をなすが、主語の「意思性」が問題とならない場合は、主語の「性質」が原因となる事柄の可能、不可能が表現される。

#### 4. ま と め

「lassen+sich+不定動詞」は、その主語が自分を巻き込む事柄に対し何らかの「意思性」をもってかかっていることを明確にあらわしている点において、「werden-受動文」と対立をなしている。「意思性」はコンテキストの中では「zulassen」、「veranlassen」などの解釈として具体的な意味解釈をもつが、その解釈はもちろんこのふたつに限られるわけではない。重要なのはこれらの意味解釈と「意思性」とは別のレベルにあることで、前者は後者の度合いと考えられる。「zulassen」などの意味がコンテキストに委ねられていること、またコンテキストがあっても「zulassen」か「veranlassen」かといった一義的な意味解釈が困難だったりすることは、lassen の意味が「意思性」のはっきりした目印という、より抽象的、機能的なものになってきていることを示唆しているように思われる。「Kausativ 体系」の中での lassen は、原則的には「間接的作用」のシグナルで、辞書記述にある「zulassen」、「veranlassen」と言った意味はコンテキストの中で与えられる「間接的作用」の具体的な形であった。また「受動体系」の中では、lassen は「意思性」のシグナルで、「zulassen」などの意味は、やはりコンテキストの中で与えられる「意思性」の具体的な形である。したが

って、lassen について、それが“zulassen”なのか“veranlassen”なのかという観点のみからの見方では、lassen の持つ体系的、機能的な意味を見逃すことになってしまうであろう。

「lassen+sich+不定動詞」は、文法書では「werden-受動文」との関係において“synonyme Form”, “Konkurrenzform”, “Passivsynonym”, “syntaktische Variante”などと名付けられていたが、以上の考察より「lassen+sich+不定動詞」は「werden-受動文」とは主語の「意思性」においてははっきり対立しており、前者を後者の“Synonym”と名付けるのは問題である。これは能動文と受動文で主語、目的語の入れ替わりにしか注目してないところから来ていると考えられる。既存の用語の中では“Konkurrenzform”というのが「lassen+sich+不定動詞」と「werden-受動文」との関係に適切ではないと思われる。

## 註

- 1) 参考にした文法書は以下の通りである。  
Admoni, Wladimir: Der deutsche Sprachbau. München 1982, S. 183; Erben, Johannes: Deutsche Grammatik - Ein Abriß - . München 1980, § 184; Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig 1972, S. 156;  
Schulz, Dora/Griesbach, Heinz: Grammatik der deutschen Sprache. München 1970, S. 62
- 2) Rottluff, Angela: Zum Verhältnis von *werden*-Passiv und der *lassen+sich*+Infinitiv-Fügung als Passivsynonym in eingebetteten Sätzen.  
In: Deutsch als Fremdsprache 19, 1982, S. 335
- 3) Brinker, Klaus: Das Passiv im heutigen Deutsch. Form und Funktion. Düsseldorf 1971, S. 117
- 4) Kolb, Herbert: Das verkleidete Passiv. In: Sprache im technischen Zeitalter, 1966, S. 184
- 5) Klappenbach, Ruth/Steinitz, Wolfgang (Hrsg.): Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Berlin 1964-1977
- 6) Nedjalkov, Vladimir: Kausativkonstruktion. Tübingen 1976, S. 149
- 7) 使用したテキストは、Hackert, Fritz (Hrsg.): Joseph Roth Werke, Bd. 4, Köln 1989 S. 183. 以後 Joseph Roth からの引用中のイタリックおよび括弧は筆者による。
- 8) Hackert, Fritz (Hrsg.): Joseph Roth Werke, Bd. 5, Köln 1990 S. 244
- 9) a. a. O., S. 246
- 10) a. a. O., S. 249
- 11) 注2) 参照。
- 12) Rottluff (1982) S. 338
- 13) 「werden-受動文」により、能動文の述語意味カテゴリー「行為 (HANDLUNG)」から、述語意味カテゴリー「出来事 (VORGANG)」に変化することは、  
Polenz, Peter von: Deutsche Satzsemantik, Berlin/New York 1988, S. 183 で指摘されている。
- 14) Joseph Roth Werke, Bd. 4, S. 60
- 15) ebenda.
- 16) a. a. O., S. 206
- 17) Westermann, Klaus (Hrsg.): Joseph Roth Werke, Bd. 1, Köln 1989, S. 845
- 18) 例えば Klappenbach/Steinitz
- 19) Ende, Michael: Momo, S. 118-119, (Lizenzausgabe des deutschen Bücherbundes 1973)なおイタリックは筆者による。